橋ほめ

一　まゐり来て此（この）橋を見申（みもう）せや、いかなもをざは蹈（ふ）みそめたやら、わだるがくかいざるもの

一　此御馬場（このおんばば）を見申せや、杉原七里大門（すぎはらななりおおもん）まで

門（かど）ほめ

一　まゐり来て此（この）もんを見申せや、ひの木さわらで門立（かどた）てゝ、是（これ）ぞ目出（めで）たい白かねの門

一　門（もん）の戸びらおすひらき見申せや、あらの御せだい

○

一　まゐり来てこの御本堂を見申せや、いかな大工（だいく）は建てたやら

一　建てた御人（おひと）は御手とから、むかしひたのたくみの立てた寺也（なり）

小島ぶし

一　小島ではひの木さわらで門立（かどた）てゝ、是ぞ目出たい白金（しろかね）の門

一　白金の門戸びらおすひらき見申せや、あらの御（お）せだい

一　八つ棟（むね）ぢくりにひわだぶきの、上（かみ）におひたるから松

一　から松のみぎり左に涌（わ）くいぢみ、汲めども呑（の）めどもつきひざるもの

一　あさ日さすよう日かゞやく大寺（おおてら）也、さくら色のちごは百人

一　天からおづるちよ硯水（すずりみず）、まつて立たれる

馬屋（まや）ほめ

一　まゐり来てこの御台所（みだいどころ）見申せや、め釜（がま）を釜に釜は十六

一　十六の釜で御代（ごよ）たく時は、四十八の馬で朝草苅（か）る

一　其（その）馬で朝草にききやう小萱（こがや）を苅りまぜて、花でかゞやく馬屋なり

一　かゞやく中のかげ駒（こま）は、せたいあがれを足（あ）がきする

○

一　此庭に歌のぞうじはありと聞く、あしびながらも心はづかし

一　われ／＼はきによならひしけふあすぶ、そつ事ごめんなり

一　しやうぢ申せや限（かぎり）なし、一礼申して立てや友だつ

桝形ほめ

一　まゐり来てこの桝（ます）を見申せや、
四方四角桝形の庭也

一　まゐり来て此宿（やど）を見申せや、
人のなさげの宿と申（もうす）

町ほめ

一　参（まい）り来て此お町を見申せや、
竪町（たてまち）十五里横七里、▷▷出羽
にまよおな友たつ

○出羽の字もじつは不明なり。

けんだんほめ

一　まゐり来てこのけんだん様（さま）を
見申せや、御町間中（おんまちまなか）に
はたを立前（たてまえ）

一　まいは立町油町（たてまちあぶらまち）

一　けんだん殿は二かい座敷に昼寝すて、銭（ぜに）を枕に金の手遊（てあそび）

一　参り来てこの御札（ふだ）見申せば、おすがいろぢきあるまじき札

一　高き処（ところ）は城（しろ）と申し、ひくき処は城下（しょうか）と申す也

橋ほめ

一　まゐり来てこの橋を見申せば、こ金（がね）の辻（つじ）に白金のはし

上ほめ

一　まゐり来てこの御堂（おどう）見申せや、四方四面くさび一本

一　扇（おうぎ）とりすゞ取り、上（かみ）さ参らばりそうある物

○すゞは数珠（じゅず）、りそうは利生か。

家ほめ

一　こりばすらに小金（こがね）のたる木に、水のせ懸（がく）るぐしになみたち

○こりばすら文字不分明。

浪合（なみあい）

一　此庭に歌の上（じょう）ずはありと聞く、歌へながらも心はづかし

一　おんげんべりこおらいべり、山と花ご
ざ是（こ）の御庭へさらゝすかれ

○雲綢縁、高麗縁なり。

一　まぎゑの台に玉のさかすきよりすゑて、
是の御庭へ直し置く

一　十七はちやうすひやけ御手（おて）に
もぢをすやく廻（まわし）や御庭かゝやく

一　この御酒（ごしゅ）一つ引受（ひきう
け）たもるなら、命長くじめうさかよる

一　さかなには鯛（たい）もすゞきもござ
れ共（ども）、おどにきこいしからのかる
うめ

一　正（しょう）ぢ申や限なし、一礼申て

立や友たつ、京（みやこ）

柱懸り

一　仲だぢ入れよや仲入れろ、仲たづなけれや庭はすんげない

一　すかの子は生れておりれや山めぐる、我等も廻（まわ）る庭めぐる

○すかの子は鹿の子なり。遠野の獅子踊の面は鹿のようなり。

一　これの御庭におい柱の立つときは、ちのみがき若くなるもの

○ちのみがきは鹿の角磨（つのみが）きなるべし。

一　松島の松をそだてゝ見どすれば、松にからするちたのえせもの

○ちたは蔦（つた）。

一　松島の松にからまるちたの葉も、えんが無（なけ）れやぶろりふぐれる

一　京で九貫のから絵のびよぼ、三よへにさらりたてまはす

○びよぼは屏風（びょうぶ）なり。三よへは三四重か、この歌最もおもしろし。

めずぐり

一　仲たぢ入れろや仲入れろ、仲立なけれや庭すんげなえ

○めずぐりは鹿の妻択（つまえら）びなるべし。

一　鹿の子は生れおりれや山廻る、我らもめぐる庭を廻るな

一　女鹿（めじか）たづねていかんとして白山（はくさん）の御山かすみかゝる

○して、字は〆（しめ）てとあり。不明

一　うるすやな風はかすみを吹き払て、今こそ女鹿あけてたちねる

○うるすやなは嬉（うれ）しやななり。

一　何と女鹿はかくれてもひと村すゝきあけてたつねる

一　笹（ささ）のこのはの女鹿子（めじし）は、何とかくてもおひき出さる

一　女鹿大鹿ふりを見ろ、鹿の心みやこなるもの

一　奥のみ山の大鹿はことすはじめておどりでき候（そろそろ）

一　女鹿とらてあうがれて心ぢくすくをろ鹿かな

一　松島の松をそだてゝ見とすれば松にからまるちたのえせもの

一　松島の松にからまるちたの葉も、えんがなけれやぞろりふぐれる

一　沖のと中（ちゅう）の浜す鳥、ゆらり

こがれるそろりたつ物

なげくさ

一　なげくさを如何（いかな）御人（おひと）は御出（おいで）あつた、出た御人は心ありがたい

一　この代（よ）を如何（いか）な大工は御指（さ）しあた、四つ角（かど）て宝遊ばし

一　この御酒を如何な御酒だと思（おぼ）し召（め）す、おどに聞いしが菊の酒

一　此銭（このぜに）を如何な銭たと思し召す、伊勢お八まち銭熊野参（くまのまいり）の遣（つか）ひあまりか

一　此紙を如何な紙と思し召す、はりまだんぜかかしま紙か、おりめにそたひ遊はし

○播磨檀紙（はりまだんし）にや。

一　あふぎのお所いぢくなり、あふぎの御所三内の宮、内てすめるはかなめなり、おりめにそたかさなる

○いぢくなりはいずこなるなり。三内の字不明。仮（かり）にかくよめり。

底本：　遠野物語・山の人生」岩波文庫
岩波書店
　1976（昭和51）年４月16日第１刷発行
　2007（平成19）年10月４日第47刷改版発行
　2010（平成22）年３月５日第50刷発行
※図版は、「遠野物語増補版」郷土研究社、1935（昭和10）年７月31日発行からとりました。
入力：Nana　ohbe
校正：阿部哲也
2012年12月16日作成
青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

●表記について

このファイルは　W3C 勧告　XHTML1.1　にそった形式で作成されています。

［＃…］は、入力者による注を表す記号です。

「くの字点」をのぞくJIS X 0213にある文字は、画像化して埋め込みました。

●図書カード